岡倉天心の『茶の本』に関する一考察

葉　　晶　晶*

1．はじめに

『the book of tea』（『茶の本』）は岡倉天心により書かれ、1906年（明治39年）５月にニューヨークのフォックス・ダフィールド社より出版された本である。『東洋の理想』（『the ideal of the East』、1903）、『日本の覚醒』（『the awaking if Japan』、1904）とともに岡倉天心の「英文三部作」と言われた名作である。東洋や日本の文化を伝えるのに茶や茶道を取り上げ、日本と西洋との美の捉え方を比較して、西洋に決して劣らない自然と調和した美を追求する日本人の美意識について言及している。日本近代の美術教育家として、生涯日本の伝統文化・芸術の復興と発展に力を尽くした天心は、美術分野における功績は研究・評価されることが多い。先行研究では、『茶の本』の影響について、茶の湯の文化価値を社会に普及した点、特に茶が芸術であり、美術であり、美であるという主張が昭和以降の茶道論を方向付けた点が強調されている。そのため岡倉天心は、茶の湯に強い関心を持った人物として印象付けられてきたと言える。しかし、岡倉天心と茶の湯の直接的な関係に疑問を投げかけた研究者もいる。例えば、田中日佐夫氏は、「その生きざまの人物像と、彼自身が書く茶の世界とはどうもぴたっと一致しないのである」と指摘し、破天荒な逸話で知られる岡倉天心と、茶の湯を直接結び付けることには抵抗があるという違和感を表明している[1]。さらに、2006年に開催された岡倉天心国際シンポジウム―『茶の本の100年』において、熊倉功夫氏[2]も同じような見解を述べている。

このように見ると、世間の一般的なイメージと違い、岡倉天心は必ずしも茶の湯に親しいわけではない。そもそも、岡倉天心はなぜお茶に関心を持ち、それを本のタイトルとして取り上げたのか[3]。『茶の本』には、どのような茶道観が見られるのか。本論文では、先行研究にあまり見られていない天心の茶道観及びその形成原因について、『茶の本』が書かれた時代背景（特に茶道界）や天心の生涯を辿りながら検討しようと考える。

2．『茶の本』の訳本と天心の略歴

『the book of tea』（茶の本）は1906年にニューヨークのフォックス・ダフィールド社から出版された英本であるが、その後すぐにベストセラーとなり、天心の代表作となる。その影響は欧州にまでおよび、フランス語、ドイツ語にも訳出されてその名声は全西欧に広がった。日本で出版されたのは、天心没後17年目の昭和四年（1929年、岩波文庫、村岡博訳）であった。他に有名な訳本としては、講談社より出版された浅野晃氏、桶谷秀昭氏の訳本などがある。本論文では、岡倉天心全集（全八巻、平凡社、1980年）に収録された桶谷秀昭氏の訳本をテキストとする。

岡倉天心は、1862年に福井藩士の次男として、横浜に生まれた。本名は岡倉覚三、幼名は岡倉角蔵である。父は横浜で藩の貿易を担当していた。

＊北京外国語大学院生

７歳頃、横浜で宣教師としても活躍する英語教師のジェイムズ・バラーの私塾に通い、英語を学び始めた。８歳に母親がなくなり、翌年長延寺に預けられ、住職玄導和尚に漢籍を学んだ。1875年の13歳で、東京開成学校（のちの東京大学）に入学した。同年、兄が病気でなくなった。大学時代からフェノロサの日本美術研究に助力、文部省に出仕し、1886～1887年にはフェノロサと欧米視察旅行した。帰国後、東京美術学校創設に参画し、明治20年、東京美術学校が設立されると、岡倉は26歳で幹事に就任、29歳で校長となった。明治31年、いわゆる東京美術学校騒動によって校長の職を追われるが、多くの教員たちが岡倉に従って辞職し、在野に日本美術院を設立した。また、中国での東洋美術調査、インドでのベンガル知識人たちとの交流やボストン美術館での美術品の整理や蒐集など、海外での活動が盛んとなった。

明治30年代後半には『東洋の理想』、『茶の本』などを英文で執筆し、日本の文化、芸術を海外へ発信していくことにも力を尽くした。そして、明治40年代の晩年は、文部省美術展覧会の創設や万国博覧会への参加協力、文化財保存など、多方面の美術行政に尽力した。大正２年（1913年）に満50、数え52歳の生涯を終えた。

３．『茶の本』に見られる茶道観

『茶の本』を構成する七つの章は、以下のとおりである。第一章「人情の碗（the cup of humanity）」では、東洋のお互いの不理解を嘆き、茶の湯を通じて理解し合おうと語る。第二章「茶の流派（the schools of tea）」では、中国の喫茶の歴史を団茶・抹茶・煎茶に分けて説明する。第三章「道教と禅道（Taoism and zennism）」では、道家思想と禅宗が日本の茶の湯に与えた影響について述べる。第四章「茶室（the tea-room）」では茶室の構造や装飾を西洋文化と比べ、第五章「芸術鑑賞（art appreciations）」では、表現者と鑑賞者の関係について解説し、第六章「花（flowers）」では、非常に詩的な文章を用いて生け花の審美観を説明する。第七章「茶の宗匠たち（tea-masters）」では、新しいスタイルを樹立した茶人を紹介し、利休の切腹の場面を描いて文章を閉じている。

岡倉天心の茶道観を端的に示す箇所は、以下のとおりであると思われる。

「茶の始まりは薬用であり、のちに飲料となった。中国では、八世紀になって、茶は洗練された娯楽の一つとして、詩の領域に入った。十五世紀になると、日本で、審美主義の宗教である茶道に高められた。茶道は、日常生活のむさくるしい諸事実の中にある美を崇拝することを根底とする儀式である。それは純粋と調和を、人が互いに思い遣りを抱くことの不思議さを、社会秩序のロマンティシズムを、諄々と心に刻みつける。それは本質的に不完全なものの崇拝であり、われわれが知っている人生ということの不可能なものの中に、何か可能なものをなし遂げるようとする繊細な企てである。

茶の哲学は、世間で普通に言われている、単なる審美主義ではない。それは倫理と宗教に結びついて、人間と自然に関するわれわれの全見解を表現しているからである。」（p.266）

「われわれの住居と習慣、着物と料理、陶磁器、漆器、絵画—文学ですら、あらゆるものが、茶道の影響を蒙ってきた。日本文化の研究家ならその影響の存在を無視することは不可能であろう」（pp.266～267）

「茶道は変装した道教であった。」（p.280）

「茶道の理想ぜんたいが、人生のごく些小な出来事の中に偉大さを考えつくこの禅の一帰結なのである。道教は審美的諸理想に基礎をあたえ、禅道はそれら理想を実際的なものにした。」（p.289）

「茶室（数寄屋）は単なる小屋で、それ以上のものを望むものではない。…ひたすら不完全を崇拝し、故意に何かを未完のままにしておいて、想像力のはたらきにゆだねて完全なものにしようと

するが故に「数奇家」である」(p.290)

それまでの茶道論といえば、それぞれの流儀を中心に語るものがほとんどであり、茶道が美とか芸術という言葉を使って論じられることはなかった。岡倉天心の上記文章から、少なくとも２つの視点が見られると言える。

1）茶道を日本文化の中核として位置づけ、国粋という方向性から論じた。

2）茶道は単なる審美主義ではなく、その精神性は道教や禅にあり、本質的には不完全の美の崇拝である。

４．天心の茶道観の形成原因

以上のように、『茶の本』に見られる天心の茶道観を分析してきた。その茶道観はどのように形成されたのか。本節では、明治期の茶道界の状況及び天心の生涯を辿りながら分析しようと考える。

4.1. 明治初期の茶道界

江戸時代は、茶道人口の増加により、点前の種類も増え、家元制度が確立し、また茶書が盛んに刊行されるようになるなどいわゆる茶の湯が大衆化する時代であった。しかし、その大衆化に伴い、茶の湯は手順や型を段階に追って習う芸事となり、精神性や創造力が失われつつ、遊芸と見られて貶されたことになっていた。さらに、1868年の明治維新以降は、新政府の意向により茶道を始めとする伝統的な文化は、旧弊なものとして排除されるようになり、かつ廃藩置県により大名などの支持者を失ったため、茶道は危機に陥った。一番代表的な事件としては、明治５年（1872年）に京都府が家職に税を課するために鑑札を与える際に、茶道家元に対して「遊芸稼ぎ人」の鑑札を与えようとしたことである。家元にほとんど弟子がいないなど、茶道界は非常に大変で困窮した時代であった。

明治10年以降になると、茶道界では少し復興の傾向が見られる。茶道具や美術品の蒐集に注目する近代の数寄者の登場が拍車をかけたことが主因だと見られる。その茶道具蒐集の動機の一つは、「近代の財界人は欧米を見聞して、各国の財界人がそれぞれ国を代表する美術品のコレクターであり、外国からの客を、そのコレクションをもってもてなすのを知った」と言われる[4]。近代の茶の湯を推進した数寄者の活躍は、明治10年代から昭和30年代に至る約80年の間である[5]。

茶の湯は本来趣味であるという傾向は早くも明治20年代に見られる。茶道具の価格が上昇した一方、道具蒐集に乗り出し、「道具買いの大鰐」と呼ばれた政商赤星弥之助が出現した。それをより強く主張したのはのちの高橋箒庵（1861～1937）であった。

「茶の湯は本来趣味である。趣味として之を楽しめば夫れでおらは満足する。無論、茶の湯に依って世間に様々の好影響を及ぼす事があるかも知らぬ。併しそんな副産物を眼中に入れるのは、既に第二義に墜るものである。」(『おらが茶の湯』)

また、明治30年代前後に活躍した数寄者としては、益田鈍翁（1848～1938）が挙げられる。「茶是常識」という座右の銘に示されるように、彼の茶は常識を大切にする茶である。

「夫、茶の湯は人の心を豊かにし友の交を厚くし、なべて世の融和をはかるを本意とす。人各其境遇を異にすれとも、茶事は貧富老若彼是の別無く、ともに楽しむこそ本意なれ」(「茶の湯」—『全集茶道』茶説茶史編)

このように、鈍翁は世間の融和を挙げ、茶の湯に対する期待も大きかったと言える。本日しばしば強調される非日常性に反し、茶の湯の日常性を主張し、既成の宗教や道徳から解放する茶の湯のイメージを受け取ることができる。

このように、明治初期から岡倉天心が1900年にアメリカに出かけるまでの日本の茶道界は非常に混乱し大変な時期であった。

4.2. 明治知識人の茶道観

岡倉天心と同世代の知識人たちは、当時の茶の

湯をどのように見ていたのか。彼らの茶道観と比較すれば、岡倉天心の茶道観の形成原因が一層明確になると思われる。英文『茶の本』の出版と同じ年に、夏目漱石は『草枕』（明治39年）において、以下の文章を書いた。

「茶と聞いて少し辟易した。世間に茶人ほどもったいぶった風流人はない。広い詩界をわざとらしく窮屈に縄張りをして、極めて自尊的に、極めてことさらに、極めてせせこましく、必要もないのに鞠躬如として、あぶくを飲んで結構がるものはいわゆる茶人である。あんな煩瑣な規則のうちに雅味があるなら、麻布の聯隊のなかは雅味で鼻がつかえるだろう。廻れ右、前への連中はことごとく大茶人でなくてはならぬ。あれは商人とか町人とか、まるで趣味の教育のない連中が、どうするのが風流か見当がつかぬところから、器械的に利休以後の規則を鵜呑みにして、これでおおかた風流なんだろう、とかえって真の風流人を馬鹿にするための芸である」（夏目漱石『草枕』新潮社、昭和25年、pp.46～47）

このように、茶道を高く評価した岡倉天心と全く対照的と言えるほど、夏目漱石は異なる見解を示している。形骸化された茶道に対して強烈な批判を展開した。

ほぼ同じ時期に、日本で茶道の改革を起こした田中仙樵[6]は、『茶禅一味』（1905年、明治38年）を出版した。田中仙樵は、裏千家十一世玄々斎宗室（1810～1877）門下の前田瑞雪に茶を学び、明治31（1898年）年に大日本茶道学会を設立した。その学会の設立趣旨書そして『茶禅一味』の序に彼の茶道観が明確に示されている。

「抑も我が国の茶道は、珠光に始まり、紹鴎に中興し、利休に大成し、遂に以て一種の国粋的道学と成るに至れり。」、「本来茶道の深味に於けるや、禅より起り、理を是に資り、礼を曲礼に定む。夫れ、然り而して之を大にしては則ち六合に渉り、而して窮尽す可らず。之を小にしては則ち修身斉家治国平天下の基と為る（後略）」[7]

仙樵は天心と同様に、禅の精神性を茶道に導入し、茶道の価値付けを国粋にした。仙樵の業績について、西山松之助氏は、「今一つの方向は、茶の心やわざといっても、それが近代的な茶の美学、哲学であることを明確にし、その論理的基盤に立脚した茶のわざを確立することであった。これは結局、利休の茶の哲学を近代的に論理化し体系化し、それをわざのうえに実践することであった」[8]と指摘している。

しかし、両者が異なる点と言えば、禅に対する態度にあると思われる。仙樵は禅の修行を重視し、茶道を「修身斉家治国平天下の基と為る」と位置づけた。これに対し、天心は禅を美学的な視点から理解し、「茶人たちの考えでは、真の芸術鑑賞は、芸術から生きた感化を生み出す者にのみ可能である。それゆえ、彼らは、茶室で行われている高度の風雅によって、その日常生活を律しようと努めた」[9]ように、日常生活を美的に律する規範として茶道を見ていた。田中秀隆氏は、その志向性に着目して天心のタイプを「生活構成の茶」、仙樵のタイプを「人間形成の茶」と名づけた[10]。

千賀可蛟が明治22年（1889年）『茶道為国弁』を著して茶道をもって国に奉ずる道を唱えたことを考えると、趣味化された茶道の現状に抵抗し、茶道を国粋的文化として位置づけて宣伝することが伝統茶道の再出発の道であることは、当時の知識人たちの共通の認識であると言える。このようにしてみると、岡倉天心が茶を切り口にして日本の文化を発信することは当時からすれば自然なことであると言える。また、茶道の精神性を道教や禅宗に求めることができるという認識も、当時形骸化された茶道への抵抗から生じたものと考えられる。

4.3. 岡倉天心の生涯と茶道観の形成

上記内容では、時代背景を中心に検討してきた。本節において、岡倉天心自身に目を向けて、その茶道観の形成原因を探そうと考える。

まず、岡倉天心と茶の湯との接点について、戸

田勝久は『近代の芸文と茶の湯』において、岡倉天心の茶の体験というものをいくつか挙げている。

(1) 正阿弥という当時の有名な茶人が岡倉家に茶を教えに来た[11]。この正阿弥は幕府の同朋のなかの、字は違うが松阿弥の可能性がある。

(2) 岡倉天心の奥さんである岡倉基子のもとに、石塚宗通（表千家の高弟、川上不白の系譜の茶匠として知られている）という有名な茶人の師匠がおり、天心に影響を与えた。

(3) 星崎波津子（九鬼隆一）邸で天心が茶に親しんでいた。

また、岡倉の身辺には、茶の湯を嗜んでいた人物が多く見出される。特に近代数寄者としては、日本美術院のパトロンでもあった原富太郎と緊密な交流があったようである。

岡倉天心の研究資料から見れば、幼少期にお茶を習った記録はないが、大学時代に箏曲と茶道もそれぞれ当時の日本第一流の師について習っていた。漢詩を学び、南画を描き、中国の古典に通じ「茶」や「琴」に親しむことは一種の社交手段でもあると考えられる。岡倉天心がどれだけ茶道に興味を持つのか分からず、茶歴も浅いかもしれないが、身内や友達にお茶関係者が多い点からすれば、お茶に親しい環境にいたことは間違いないと言える。

西川長夫氏は『幕末・明治期の国民国家形成と文化変容』において、岩倉使節団の秘書官として「米欧回覧実記」の執筆を担当し、能楽復興運動に尽力した久米邦武を中心に、能楽復興と国民国家形成との関連性を検討した。能の復興は、能が西洋の演劇に匹敵するものであると岩倉使節団によって見直されることがまず必要である。茶道も同じように、その再認識と復興には、そのような「外の目」が必要とする。岡倉天心の略歴を振りかえってみると、日本育ちの方だとはいえ、「外の目」を持つ者だとも言えるのであろう。当時通商貿易で活況を呈していた横浜に生まれ、母語話者並みに再生できる能力を発揮する適齢期と言われる７歳にすでにアメリカ人宣教師ジェイムズ・バラーの英語塾に毎日通っていた。また、英語とほぼ同時に、お寺で漢文の教育を受けたので、岡倉天心は子供の頃から日本語・英語・漢語という三か国の言語や文化に触れ、国際的な視野を持っていたと言える。その「外の目」を持っているからこそ、この茶に東洋文化の精神を見出し、欧米を旅して東洋の優秀性を見出すことができた。

また、『茶の本』にしばしば出てくる「不完全への崇拝」について、岡倉天心の茶道観と言えるとともに、彼の人生観でもあると思われる[12]。家庭が裕福で小さい頃から英才教育を受け、今で言うと「飛び級」で東京大学１期生として入学し、卒業後に文部省に出仕するなどいかにも順調な人生を送ったようである。しかし、８歳で母に亡くなられ、一年後父が再婚し、兄弟と離れて長延寺に預けられ、玄導和尚の指導を受けながら漢籍を学び、14歳の時はまた兄が亡くなるなど、幼い身で寂しさや孤独に耐えながら生きてきたと推測される。『茶の本』が書かれた時期を見れば一層理解できると考える。1906年と言えば、岡倉天心は40代である。1898年に35歳で、怪文書騒動[13]で岡倉天心は帝国博物館美術部長並びに東京美術学校校長を辞職するはめになった。その後、日本国内では不遇な時代が続いていた。1901年に自らの芸術論を確かめるために一年間インドを旅したが、インドが当初の理想とかけ離れ、その古代文化の喪失及び荒廃ぶりに心を痛めたようであった。1903年の40歳には、茨城県の五浦の海岸に土地を購入し、隠棲の地を求めた。

このように、岡倉天心の境涯を辿りながら、彼の茶道観の形成原因を分析した。お茶に親しい環境にいることから、それなりの教養を身につけていた。順調満帆の人生を送ってきたように見えるが、孤独や空虚を耐え、道教や古代中国やインド文化への陶酔などは、彼の茶道観の形成につながる。

5．おわりに

本論文では、岡倉天心の生きる時代及び生涯を振り返りながら、彼が『茶の本』を執筆した動機、そして『茶の本』に見られる茶道観及びその形成原因を検討してきた。「日本の茶道は中国の唐宋文化を引き継いだものであり、日本文化の中核であり、単なる審美主義ではなく、道教や禅に精神性が潜められ、その本質は不完全への崇拝である」という茶道観の形成には、環境的な外部要因と内面的な要因があると考える。明治維新以来、欧米文化が流れ込む一方、明治20年代には、ナショナリズムの風潮が起こり、茶道界では不景気な状況が続く中で、茶道具蒐集をする近代数寄者の登場で少し復興の傾向が見られた。岡倉天心が茶をテーマにしたのは、趣味化された当時の茶道現状に抵抗し、茶道を国粋的文化として位置づけて宣伝することが伝統茶道の再出発の道であるという当時の知識人たちの共通の認識からきたものとも言える。一方、岡倉天心の境涯を分析してみると、子供の頃から英才教育を受け、茶や琴に親しみ、飛び級で優等生として順調に出世した一方、幼小時代に母や兄と死別し、スキャンダルで公職から追われて不遇な時期に直面するなど波乱万丈な人生を送ってきた。少年時代に培ってきた国際的な感覚にインド、中国（清国）、米国への旅の感想は、「外の目」を持っている岡倉天心を作った。このような矛盾した心境は、晩年に執筆した『茶の本』において茶道の精神性を禅宗や道教に求め、不完全を崇拝したという茶道観にも反映されている。

参照文献

赤根彰子著『岡倉天心　その生涯を彩る思想』大蔵出版　1988
木下長宏著『詩の迷路—岡倉天心の方法』学藝書林　1989
木下長広著『岡倉天心』ミネルヴァ書房　2005
熊倉功夫著『近代茶道史の研究』日本放送出版協会　1980
斎藤康彦著『近代数寄者のネットワーク　茶の湯を愛した実業家たち』思文閣出版　2012
財団法人三徳庵ワタリウム美術館『岡倉天心国際シンポジウム　茶の本の100年』小学館スクウェア　2006
茶の湯文化学会編『講座　日本茶の湯　全史』第三巻　思文閣出版　2014
東郷登志子著『岡倉天心「茶の本」の思想と文体 the Book of Teaの象徴技法』　慧文社　2004
田中秀隆著『近代茶道の歴史社会学』思文閣出版　2007年
谷端昭夫著『日本史のなかの茶道』淡交社　2010
桶谷秀昭訳「解説—憂い顔の美の使徒」『茶の本』講談社　1994
中村愿著『美の復権』邑心文庫　1999
堀岡弥寿子著『岡倉天心考』吉川弘文館　1982
千賀四郎編集『茶道聚錦六　近代の茶の湯』小学館　1985
平凡社編『岡倉天心全集』第一巻・別巻　1980
依田徹著『近代の「美術」と茶の湯　言葉と人とモノ』思文閣出版　2013

注

1　「近代における茶道と美術」『茶道聚錦』第六巻　淡交社　昭和60年　pp.146～147
2　「茶道論の系譜から見た『茶の本』の異質性」『茶の本の100年』小学館スクウェア　2006年　pp.90～107
3　先行研究での主流の解釈としては、当時欧米で注目されていた新渡戸稲造の『武士道』を「死の術」として読み取るのに対し、「生の術」として茶の湯を強調することで、日露戦争後の日本を平和国としてアピールしようとしたことが挙げられる。
4　「近代数寄者の登場」千賀四郎編集『茶道聚錦六　近代の茶の湯』小学館1985　p.15
5　前掲書「数寄者の茶の湯」「表１生年による数寄者の四類型」p.106
6　1875年（明治８年）９月３日～1960年（昭和35年）10月６日。形骸化した既成茶道を批判して大日本茶道学会を創設し、秘伝公開・流儀否定の精神、『南方録』の本格的な研究で高く評価されている。『茶道改良論』などの著書がある。熊倉功夫氏は『近代茶道史の研究』において、田中仙樵の茶道改革運動には、近世茶道の継承者としての側面と次代の茶道の出発者としての側面が複雑に内包されていると評価し、彼を開拓者として位置づけた。
7　『茶道学誌』第一号、原文は以下のとおり。「抑我

国之茶道者、始于珠光、中興于紹鴎、大成于利休、遂以至成一種之国粋的道学矣、本来茶道於深味也，起自禅，資理於是、定礼於曲礼、夫然而大之則渉六合、而不可窮尽、小之則為修身斉家治国平天下之基、岂不復広大哉、然而星移物換茶道之弊有名無実、化成一種之遊芸、為婦女子之所翫弄、熟視今之茶人者、往々蒐集古器物、以誇示衆人、或表面正襟巧言令色、而裏面誹謗笑遷時、其甚者為庭園数寄結構至于蕩尽家産、於之乎為識者之所擯斥、僅留其形跡於逸遊者及婦女子間焉耳、嗚呼茶道之衰亦一至此乎、茶聖宗亘翁茶禅論曰、愛奇貨珍宝、択酒色之精好、或結構茶室、翫樹木泉石為遊楽設者、違茶道之原意、只偏甘禅味為修行、是吾道之本懐也云々、由之観之転不堪嘆也、本会之起非敢好事不得止耳、乃以赤心自任明茶道之本旨、以保存国粋、外則示宇内万国、内則也修身斉家之基礎、以欲報国家、満天下同感之士、請来賜賛成本会至嘱至嘱。」

8 「近代茶道の先駆者」『田中仙樵全集』第一巻月報

9 『岡倉天心全集　第一巻』平凡社　1980年　p.317

10 「知識人と茶の湯」千賀四郎編集『茶道聚錦六　近代の茶の湯』小学館　1985　p.131

11 昭和4年（1929年）の岩波文庫版『茶の本』の刊行に際して、岡倉の弟である岡倉由三郎（1868～1936）が書いた「はしがき」の情報によれば、明治13年（1880年）に東京大学を卒業した岡倉は、自宅に月に何度か「正阿弥という幕末の有名な茶人」を呼び、茶の湯の稽古を受けている（岡倉由三郎「はしがき」『茶の本』（岡倉覚三）岩波書店、昭和４年、p.6）。

12 桶谷秀昭氏は『茶の本』の詩情性を岡倉天心のペシミズムの反映であると指摘し、木下長宏氏は「悲哀の情」こそが『茶の本』の基調であると指摘する。

13 美術学校騒動ともいう。1898年に博物館の運営方針や、九鬼の妻・九鬼波津子をめぐる問題（築地警醒会なる団体が岡倉批判の怪文書を関係各方面に送る）で岡倉天心が帝国博物館美術部長並びに東京美術学校校長を辞職するにあたり起きた学校騒動。「東京美術学校騒動文書」『岡倉天心全集別巻』平凡社　1980年　p.166